
孤独の王

舞閃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

孤独の王

【Nコード】

N6284P

【作者名】

舞閃

【あらすじ】

100年後の未来。

停滞していた科学は、人類の脳の未知の機能が明かされたことによってその歩みを再び加速させた。

その機能によって記憶の、知識の、思考の、感覚の壁が壊され始めた時。

人類は、無慈悲な神の存在を知った。

予想されるラグナロクに対応するため、人類は彼らを統べる王を求める。

王に選ばれたのは、一人の少年だった。

21世紀における、人類の最も大きな発見とは？

その問いに答えるために、外せぬ書籍が一冊ある。

『脳の未知領域と共有知』というその書名。

数ある学術書の中でも、飛びぬけて有名な学術書である。

ドイツ人生物学者エルンスト・ミュラーによって書かれたこの学術書は、その名の通り、人間の脳のある働きについて書かれている。

身体制御から思考まで人間の活動のほとんどを支配する脳の役割の一つに、記憶がある。

ミュラーによつて『共有知』の概念が広まる以前まで、記憶は脳の海馬に蓄積・貯蔵されているものだと思われていた。

あたかもハードディスクのように。

それが完全に覆されることになるとは誰が思っていたか。

おそらく、ミュラー自身以外には存在しなかったに違いない。

誰が考えようか。

記憶は、脳どころか人間の体内のどこにも蓄積されないなどということ。

別次元に蓄積されているなどということ。

そして脳は、それを送受信するに過ぎないということ。

ミュラーは数千にも及ぶ実験と思考を重ね、20年の時を経てそれを解明した。

人間の脳には記憶を蓄積する機能が僅かしかなく、情報量でいえば一日分ほどの記憶しか保持できない。

そのため、脳は記憶情報を常に別空間（ミュラー空間）に送信して

おり、必要に応じて受信しているのだ。
そしてその空間は個別のものではなく、人類共通の空間である。
その空間にたまった人類の記憶情報を「共有知」と呼ぶ。
共有知は人種も年齢も関係なく、人類すべての記憶情報である

「先生、ちょっとわけわかんないんだけど」

「ん？ああ、ここはちよつと難しいからね。でも受験にも必ず出るから、分からないことがあつたらどんどん質問していい。それで、どの部分が分からないかな？」

「その『共有知』ってのがよくわかんない。だって、記憶って自分のものしかないじゃん。もし人間の記憶が一緒になつてるなら、ほかの人の記憶も混じっちゃいそうだけど。」

「うん、確かにそう思っても無理はない。でも…そうだな、インターネットを思い浮かべるといい。ネット上には無数の情報が溢れているけど、検索するなりなんなりして、自分がほしい情報だけ手に入れられるだろう？」

「でも他人の記憶は知りたくても知れないじゃん」

「ええ。『個人領域制限』がありますからね。SNSのように、パスワードのようなものがかかっているとさえいいかな。人間は普通、自分の記憶が入ってるページのパスワードしか持ってないんだ。」

「ああ、そういうことか。なら結局人の記憶を覗くことはできないのか」

教師に説明されて納得する少年。

その様子は聊か残念そうにも見える。

そんな少年に囁し立てる声が飛んだ。

「おい恭平、お前誰の記憶覗きたかったんだよ」
「どうせお前のことだから、女子の記憶だろ？」
「えー、やだー！？」

女子生徒の悲鳴を浴びて、顔を真っ赤にする少年。

「うるせー！んなわけあるか！」
「うわ、顔真っ赤だぜ？」
「お前ら…いい加減にしろよ…！」

下らない口喧嘩。

しかし思春期真っ只中の子供は、少々からかわれただけでも許せないほど腹を立てる。

囃し立てる生徒を睨みつけ、今にも飛びかかりそうだが、教師は、やれやれ面倒くさい、という内心を隠しながらそれを止めるようにする。

その時、一人の生徒の声が上がった。

「いいなあ、記憶覗き。できるなら俺もやりたいよ」
「ええ！？真まで！？」
「そりゃそうだ。好きな子の記憶とかなら、知りたいもんだろ？」
「うわー、真くんまでそんなこと言うなんて、幻滅ーやらしー」

その発言で、真しんと呼ばれる生徒へ矛先は移った。
囃し立てる言葉を冗談を交え、笑いながらいなしていく。
喧嘩が勃発しそうであった先ほどの雰囲気は嘘のように霧散していく。

（まったくこの子は、中学生とは思えないな…）

教師は苦笑しながらその様子を見守る。

坂城 真。

雰囲気や人の心中を察することに長ける彼。

そんな彼はいつだってクラスの中心だ。

今だって彼をからかう生徒たちも、本気で彼に悪い感情を持っていない者はいない。

ある時は皆を引っ張り、ある時は皆に笑われることも躊躇しない。

こんなにも「大人」な中学生などそうはいない。

彼が自分のクラスの生徒であることに、クラス割を担当した教師に感謝を述べたほどだ。

それだけに。

なぜこの子が、という気持ちがある。

いや、まだ「そう」と決まったわけではない。

まだ確認段階なのだ。

ともすれば暗い感情にとらわれそうになる自信を律し、教師は生徒たちに声をかけた。

「それでは、坂城くんはこのあと少し職員室に来てくださいね」

その後、授業はつつがなく終わった。
授業が6時間目、本日最後の授業であつたためそのままHRへと移る。

いくつかの連絡事項を終えた後、担任は真を呼び出した。
真は心当たりが特になかつたために首を傾げた。

「真、職員室に呼ばれるなんてお前何やらかしたんだよ?」

「いや、心当たりはないんだけど…」

「学級委員の仕事かなんかじゃないの?」

「いや、それならいつものようにここで用事を言われると思うんだよ」

「そうだよなあ。まあ、それなら放課後遊びに行くのはどうなるかわからないな」

「うん。皆には悪いけど、用事が何か分からないしどれくらい時間がかかるかわからないから、今日は俺はやめとくよ」

「そっかあ。真がいらないんじゃないよ。ちよつとつまらないなあ。」

「ごめん。また誘ってくれよ。それじゃ職員室に行ってくる。」

そう言つて教室から出ていく真。

それを見送つた後、生徒たちは各々が話し始める。

彼らにも、真が呼び出される理由に心当たりはなかつた。

こんな呼び出され方をしたのも初めてだろう。

だからこそ皆が疑問に思つていたのだが…

一人の生徒の言葉に、場は凍りついた。

「なあ、あいつもしかして共有率『A』判定だつたんじゃねえの?」

共有率A。

一万人に一人と言われる、その基準。

真はそれに達したのかもしれない。

普通ならそんなことは笑い飛ばして否定する。
だが、真なら？

同じ中学生とは思えないほどに大人びていて、やること全てが飛びぬけている彼なら…

充分にあり得る、皆はそう思っていた。

共有率判定テスト。

それは共有知が実証された10年後、2080年から全世界で実施されているものだ。

共有率とは、共有知を活用できる範囲を示す、脳的能力値である。共有率が高ければ高いほど、共有知を活用することができる。

出生時、15歳時、25歳時と人生で3回必ず受けることになるこのテスト。

そこで判定され1～100%のパーセンテージで示される共有率は、その値に応じてランク分けされる。

A～Eランクまでの5段階で、20%ごとに区切られる。

40～60%はCランクとされ、人口の7割がここに分類される。

それを20～80%…B Dランクまでに広げると、実に99.99%の人間がこの枠に納まる。

このランクの人間は、共有率の差が実生活にそれほどの差をもたらすわけではない。

特別な能力が身につくわけでもなければ、共有知を用いた通信装置や学習機能の扱いも問題ない。

「普通」の人間として扱われる。

では、それ以外　AランクとEランクのものはどうか。
こちらはあらゆる意味で特別である。

共有率による差別や階級意識などを防ぐため、通常共有率テストの結果は本人にも知らされない。

だが、AランクとEランクは違う。

本人や親にも伝えられる。

そして、専用の教育施設へと送られる。

その理由はAランクとEランクで異なる。

Aランクの者は、その能力の高さから。

共有知に関する能力を開発し、それを活かせる道を歩ませるため。
言ってみれば、エリート道を歩ませるための措置だ。

Eランクの者は、その逆だ。

通常、このランクの者はほとんど共有知を利用できない。

つまり、ほかの人間と価値観なども全く異なる。

その犯罪率は100倍にもなるが、同時に名のある芸術家や発明家の多くはこのランクであると言われる。

教育しだいで黒にも白にもなるが、通常の教育では多くの者が脱落する。

そのため彼らについても特別教育の道を歩まされる。

このように、共有率テストとは、普通の人間には縁の遠いものではないがあるが…

現代社会の一つの機能として、確実に浸透しているものであった。

そして、生徒たちの想像は当たらずも遠からずであった。
今まさに、真は教師から共有率テストのことを告げられているのだから。

「坂城。共有率テストで再試験の判定が出た。明日は再試験を受け
てくれ。学校は公休扱いになる」
「は？」

共有率再試験。

これがどのような事を自分にもたらすのか、真にはわからなかったが。
なぜか漠然とした不安が身を包み、その悪寒に身震いした。

インターフォンが鳴る。

時間は9：00丁度。

予定されていた時間から1分のズレもない。

真が応答のボタンを押すと、立体映像が表示された。

スーツに身を包んだ、一人の女性の姿。

『共有知管理局の宇津木です。』

『あ、わかりました、すぐにします。』

昨日教師に言われていた通り、管理局の迎えが来たようだ。

簡単に支度を済ませてオートロックを解除して外に出る。

そこには一台の車が止まっていて、その前に先ほどの女性が立っていた。

「はじめまして、坂城真です。」

「はじめまして。共有知管理局の宇津木涼子です。早速だけど、車に乗ってもらえる？」

「はい」

黒い車の後部座席に乘せられる。

運転手は別にいるみたいで、宇津木さんも俺の隣へと座る。

二人が乗り込むことを確認すると、運転手はゆっくりと車を発進させた。

震動は全く伝わってこないし、音も静かなものだ。

おそらく最近はやりの水素自動車だろう。

車に興味も知識もない自分でも、この車が高い価値のものであろうことは推察できた。

「それで、再試験ってどこでやるんですか？」

「ええ、ちよつと遠いけど東京で受けてもらっわ。この県内に試験を行える施設はないの」

その言葉に真は驚いた。

てつきり、学校で受けたテストと同じようなテストを行うと思って
いたからだ。

そのため市役所かどこかでやるのだろうと考えていたが、どうやら
そんなに簡単なものでもないらしい。

「そんな大がかりな試験なんですか？」

「そうでもないけれどね、特殊な環境が必要なの。普通の試験でも、
共有率を出せるけれども。一分のズレも出さずに正確に測ろうと思
うと、通常の試験では難しいのよ。」

「なんで僕が再試験になったんですか？もしかしてAランクとかE
ランクとか、変な数値が出たんですか？」

「…それはまだ言えないわ。再試験の結果、何かの間違いであるこ
とがわかったらまずいもの。もし再試験でも同じ結果が出たら…そ
の時は改めて説明するわ。」

「わかりました。」

どうやら答えてもらえないようだ。

それが規則なら粘っても無駄だろう。

聞くこともなくなった真は、会話をやめて趣味に没頭することにし
た。

真の趣味 人間観察である。

もちろん、友人など周りの人間に対して趣味は人間観察です、なん
てことを言ったことはない。

そんなことを言えば気味悪がられるだろうことは分かる。
だが、それ自体をやめるつもりはなかった。

さて、この宇津木という女性。

身長は女性の平均といったところか、少し大きいくらいだろう。
髪のはきは肩にかかるほどだが、特別艶があるようにも見えない。
整った顔立ちをしているが、施された化粧は最低限。

身だしなみは最低限整えている程度である。

スーツを着ていることもあり、非常に硬い印象を受ける。

ではその性格はどうか。

先ほどから真に対する態度は温和であり、会話するときには笑顔を
絶やさない。

しかし彼女はその表情を続けることに慣れていない。

頬の筋肉が余計に緊張しているし、何よりその目が笑っていない。

彼女の本質は、ルックス同様怜悯なものであるう。

キャリアウーマンと言えばわかりやすいか。

いや、さらに的確に表現するとすれば科学者然としていると言える。
常に”観察”しているのだ、真を。

その目はまるで実験を眺めるような冷静なそれであり、やはり科学
者という表現は的を射ていると思う。

もしかしたら宇津木さんは本当に科学者なのかもしれない。

わざわざ迎えに来る人だから、単なる事務職員だと考えていた。
だがそれならこの運転手一人でいいはずだ。

わざわざ運転手とは別の人間が来るのはおかしい。

ならば印象通り、彼女は科学者。

おそらくは共有知に関する専門家で、既に試験は始まっているのかもしれない。

有り得ない話ではない。

共有率判定テストが広まるまでは、カウンセリングによって大まかな共有率を測っていたという。

この女性が、そのようなカウンセラーでないとなぜ言い切れる？

「地下高速道を使ってもあと1時間はかかるわね。何か映画でも見る？」

風景を見るふりをしながら思考する自分を暇しているとったか。あるいは、これも自分の反応を見るために用意されたものか。

どちらにしろ、生憎真は映画に興味はなかったから丁重に断った。

「いえ、お気遣いありがとうございます。でももし宇津木さんがよかったですら、色々とお話したいんです。映画なんていつでも見れますが、宇津木さんみたいな大人の女性と話す機会ってあまりないですから。」

「あら、その年でもうナンパの真似ごと？」

おかしそくに笑う。

わざと浮ついた表現にしてみたが、意外に気を悪くはしない。

ただの堅物ではなく、本当の”大人の”女性ということか。

この女性の『本質』を見たい。

いつもの悪い癖だ。

だが俺は俺を止められない。

人間は誰もが何重ものの仮面を被っているが、それを？すとても美

しい素顔がある。

もちろん、必死に仮面を被り続ける人間も愛おしい。

だが、仮面を外した姿こそ千差万別。

「観察」する価値のある対象となる。

タイムリミットは1時間。

それまでに、この女性の仮面を取り除く。

普段接しているクラスメイト達ならば十分な時間だが、この女性に
対してはどうか。

大人の仮面は概して強固であり、宇津木はさらに普通の人間のそれ
よりも強そうだった。

だが、再試験が終わった後、宇津木に再び会える保証はないのだ。
ならば今、するしかない。

この女性の姿を見るチャンスは、今この瞬間なのだ。

「はい。なんか宇津木さんって大人の女性って感じで。クラスメイ
トの女子とは違うなあと。」

「あらありがと。でも流石に中学生と比べられるとね。」

坂城真、「候補」の中学生に唐突に褒められ続ける。

訝しげに顰めそうになる眉をこらえ、笑顔で答えながら考える。

生憎、中学生の世辞に一々心動かされる自分ではない。

だが、どういう意図でこんな話を振ってきたのか興味はある。

あの試験結果が間違いないならば、彼こそが長年探してきた存在だということになる。

だがもしそうなら、この人当たりの良さは有り得ない。

話していると、まるで「Aランク」の人間と話しているかのような。やはりあの試験結果は間違いだったのだろう。

そう簡単に、見つかるはずがない。

そう微かな落胆を覚えていたからかもしれない。

心に隙が生まれたのだろう。

だから私は、彼の突然の言葉に硬直してしまった。

「ええ。さすがに科学者は落ち着いてますよね」

「……なんですって？」

「え、宇津木さんって科学者でしょう？」

きょとんとしながら言う坂城真。

どうしてそれを？

自分は自己紹介の時にそんなことを言ったか？

いや、言っていないはずだ。

ただ管理局の職員であるとしたか。

「なんでそう思ったの？」

言ってから、しまった、と内心に苦いものが満ちる。

惚けて否定するべきだった。

これでは認めているも同じだ。

何を動揺している！

「さっきから僕を『観察』しているように見えますしね。半分カマかけでしたが、正解みたいですね」

「……」

「さっきから無理してるでしょう？別に笑顔じゃなくても大丈夫ですよ、普段の表情で」

「何を……」

「意外と動揺しやすいんですね。視線がガラスに移りましたよ。自分の表情を確認しましたか？」

なんだ、この少年は。

イラつく内心を抑えきれず、睨みつけるように少年を見つめる。

「ああ、気に障ったらごめんなさい。でもその表情のほうが、先ほどまでより余程魅力的ですよ」

この話術。

そして観察力。

涼子の頭には、坂城真から連想させる人間がいた。

「ええ、正直言つとね。あまり笑顔は慣れていないわ。それに科学者というのも正解よ。大した観察力ね」

「ありがとうございます。でも……」

そこでまた少年は視線をぶつけてくる。

徹底的に探る視線。

これではどちらが観察しているのかわからない。

「宇津木さん、もう一枚仮面を被っていますね。僕を通して見ているのは誰ですか？」

その言葉に、思わず目を見開く。
なんだ、なんなんだこの人間は。

「誰か僕に似た人でも近くにいますか？…汗が滲んでますよ。
宇津木さんみたいに冷静な人がそうなるなんて珍しいですね。な
ら僕を通して見ているその誰かへの宇津木さんの感情は…」
「うるさい！！」

怒鳴って遮る。
頭にきている。

なぜ中学生程度のガキにこんなことを言われなければならないのか。
手を出さなかった自分を褒めてやりたいくらい、頭にきている。

しかし、そんな自分を少年は笑いながら見つめている。
嘲笑しているわけでも、無理をしているわけでもない。
ごく自然に、爽やかに、そして慈しむように。

「恐怖と怒り。なるほど、僕はあなたのことが好きになれそうです、
宇津木さん」

その言葉に返す気力は既になかった。
一刻も早く再検査をして、この少年から離れたい。
間違いない、この少年はあの女と同種の存在だ。
相手にすればするほど、こちらが消耗するだけだ。
…まだ到着まで30分はある。

それまで、この尋問のようなやり取りに耐えられるだろうか…？

しかし以後、少年は自分から話しかけることはなかった。
それに安堵しきることができず、緊張を崩さずに居続ける。
そんな居心地の悪い雰囲気にもせず、少年はただ微笑んでいた。

再試験の内容は、以前受けたものとそう変わらないように思えた。問診表への回答をしながら真は思う。

これならわざわざ専用の施設に来る必要はない。

あるいは、この後に何か追加検査があるのだろうか？

その考えは正しかったようだ。

ペーパーテストが終わった後に真が案内された部屋には、大がかりな機械があった。

病院にあるMRI、CTスキャンの装置を想像してもらえばいい。横になると全身がすっぽり装置に包まれるようになっていく。

「この装置は何をするためのものですか？」

近くの検査技師と思われる男性に聞いてみる。

答えてもらえないかとも思っていたが、あっさりと返答があった。

「夢の内容を観察・記憶するための装置だよ」

「ああ、噂には聞いたことがありますね」

唯一つ、真には気になることがあった。

「僕、今まで一度も夢を見たことがないのですが……」

そう言っていると、検査技師は露骨に眉をひそめる。

考え込むような所作を見せ、手元の書類に何やら書き込む。

「夢は例え見えていても記憶に残らない場合も多いからね。あるいは、

レム睡眠が極端に短い体質かもしれない」

「睡眠障害ってことですか？」

「そのあたりも一緒に調べられるから、とりあえず検査を受けてみてくれ。」

そう言いながら技師は錠剤を渡してきた。

「即効性の睡眠薬だ。これを飲んでそこに横たわって」
「はい」

渡された水と一緒に飲みこむ。
するとすぐに睡魔に襲われる。
効き目が素晴らしい。

慌てて装置の台に横たわると、すぐに俺の意識は暗転した。

「どう？」

「…一面の闇です。脳波を見ても、現在レム睡眠中であることは確かなのですが、なんの像も浮かび上がりません」

「ということは…」

「ええ。ほぼ間違いありません。後はA+の直接判断テストが残っ

ていますが、確認程度です。彼が例の存在であることは疑いありません。それにしても、本当にいたんですね…」

眉唾物だと思っていました。と検査技師は続ける。

「直江博士やあなたの理論が、正しかったことの証明にもなりますね」

「ええ…」

複雑そうな表情で彼女　宇津木は同意した。

やはり、あの少年が”あれ”であることに間違いないだろう。

だがあのような人格は予想していなかった。

もつと破壊的な、コミュニケーションをとるのも難しい相手だと思っていた。

確かに異常性は垣間見えたが、コミュニケーション能力は人並み以上だ。

共有知を全く使わずにあの観察力とはどういうことだろう？

「とりあえず、この検査でも測定結果は変わらないわけね？」

「ええ、間違いなく。」

「なら直江博士を呼ばないとね…」

「…博士がこちらに来られるのですか？」

嫌そうに聞いてくる検査技師。

その感情を隠そうともしない。

似たような感情を持っている宇津木は特にそれを咎めたりはしなかった。

「最終試験には博士も立ち会つと聞いているわ」

「…そうですか。私は彼を起こした後、試験結果報告書の作成に入

ります。博士の相手はお願いします。」

「わかつているわよ」

溜息を吐きながら答える。

結局、彼女の相手は直接の部下である自分がするしかないのだ。

憂鬱に浸りそうになる自分を抑え、宇津木は直江を呼びに行くことにした。

「おはよう。気分はどうかね？」

「意外にすつきりしています。すごい薬ですね。普段も使いたいくらい」

「ちょっと強い薬だからね、それはできないよ」

苦笑しながら技師は答える。

こうして話していると普通の少年だ。

こんな彼が「例の」存在だとは到底思えない。

まあ、もし本当ならば自分が測れるような存在ではないか。

観察しながらも、技師はそう思っていた。

当然、真はその視線に気づいている。

…というよりも、この施設に到着して以来、会う人間すべてに観察されている。

そして、その視線には観察以外の興味が含まれていることも。

どうやら、自分は有り得ない共有率を示したのではないだろうか。

A+かE-か。

どちらにしろ今まで通りの生活が送れるようには思えなかった。

厄介なことだが、ポジティブに考えれば楽しみでもある。

環境が変われば人間関係が変わる。

新しい人間との出会いは、真にとって無類の楽しみのうちの一つである。

「これで試験は終わりですか？」

「いや、最後の試験が残っている。隣の部屋で待機していてくれな
いか」

「わかりました」

指示されたドアから部屋を出る。

するとそこはゲストルームのような作りになっている。

簡素ではあるが調度品もあり、研究室然としたほかの部屋とは趣が異なるようだった。

柔らかなそうなソファに腰を掛け、真は思考する。

宇津木涼子。

真の興味を引いた人間。

彼女の本質は恐怖と、それに打ち勝とうとする怒りの感情だ。

強い人間だ。

恐怖を持ちながら、それに屈せずになお戦おうとする姿勢は好ましい。

あと知りたいのは、その恐怖の対象が何に由来するかということだ。先ほどの問答ではそこまで知ることができなかった。

自分に似た誰かではないか、という想像はできたがそれまでだ。

彼女のような強い人間に恐怖を感じさせる人間。

真は興味を持っていた。

会いたい。

会話したい。

観察したい。

征服したい。

「入るわよ」

ノックとともに宇津木の声がする。

感情にとらわれていた頭を切り替え、笑顔で彼女を迎える。

部屋に入ってきたのは、彼女だけではなかった。

自分と同じくらいの一人の少年と、宇津木よりやや年上と思われる大人の女性。

その二人を目にした瞬間、真は強烈な感情にとらわれた。

真にとつて、その二人の人間はこれまで会ったどの人間よりも魅力的に見えた。

彼の勘は告げていた。

この二人のどちらかが、宇津木の恐怖の対象だと。

「はじめまして、坂城真君。私はこの施設の管理者、直江よ。この子は天木亮。…まあ、私の助手みたいなものね」

「……」

無言で頭を下げる少年。

それを視界の端でとらえつつ、真の視線は直江の視線と合わさっていた。

そうしてお互いが理解する。

なるほど、確かに自分に似た目をする。

口の端を釣りあげながら、直江は言う。

「これが最後のテストになるわ。まあ、もう確認したいなものだけどね。あんたの試験結果が間違いないだろうことはもうわかってる」「そうですか。それなら僕にもその結果は教えてもらえるんですか？」

「このテストが終わったらね。まあ、簡単なものだしすぐに済むわ。天木、どう？」

天木という少年がじっと真を見つめる。

数秒にも満たぬ後、少年は瞼を閉じて何かを思考しているようだった。

1分近くそのままでしたらう。

再び目を開いた少年の、真を見つめる視線には何か含むところがあるようだった。

「……なにも感じ取れません。間違いない、でしょう」

何をしたのか。

真には全く分からなかったが、今のがテストの一環だったというところか。

直江が頷き、こちらを向く。

「間違いないわね。正式な試験結果は後で通知されるけど、今こ
で結果を先に伝えておくわ。坂城真、あなたの共有率は……」

「ゼロ、よ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6284p/>

孤独の王

2011年1月4日04時18分発行